

8

近代朝鮮における宣教医療と植民地医学

—その類似点と相違点について—

小田 敏花

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

18世紀以降ヨーロッパ諸国の国勢管理において、公衆衛生や予防医学を含む近代医療が重要な役割を担うようになった。近代医療の普及は、国家内部における「生権力 (bio-power)」の行使に深いかかわりをもち、国家主導による医療の制度化の契機となったという意味で西洋医療史における大きな分岐点を形成した。こうした近代国家の医療モデルの延長線上に植民地医学 (colonial medicine)・帝国医療 (imperial medicine) が発展し、近代医療は日本、朝鮮をはじめ世界の諸地域へと移入されていったのである。

近代朝鮮において医療の近代化は、主に、キリスト教諸派のミッションによる宣教医療 (missionary medicine) と、日本植民地政府によって制度化された植民地医学・帝国医療という、近代西洋医学を〈権力=知〉に据えた2つの医療体系によってなされた。

朝鮮において近代医療の先陣を切ったのは、宣教医療であった。医療事業は、宣教師が手がけた数多の事業のなかでも、最も重要視されたものの一つであった。それは、病気の治療を通して現地人の身体を「救済」することが、キリスト教に対する嫌悪や偏見を緩和し、改宗を促すことに寄与したからである。

だが実際に、朝鮮における近代医療の移植が本格化するのには、日本の植民地支配権力が「人口」の統治・管理技術として植民地医学を制度化し、導入してからのことであった。

政治や経済をはじめさまざまな近代化の過程のなかで、医療の近代化は、ややもすれば、朝鮮社会に「良い」ことをしたというように進歩史的に評価される嫌いがある。こうした議論では、科学技術としての医療の「近代性」にのみ着目し、医療の近代化および制度化の背後にある権力構造を無視する傾向がある。日本の植民地医学がそれ相当の影響力をもてたのは、科学技術に裏付けられた近代的要素があったからであるのはいうまでもない。だが、圧倒的な文明の力を盾としてそれを強要し、同時に伝統文化を否定・弾圧していった国家の強制力については、正当化するには難があるだろう。

これは、宣教医療についても同様のことがいえる。海外伝道と植民地主義・帝国主義との関連については、これまで多くの研究がなされてきたが、近代朝鮮における宣教師の医療事業について帝国主義の観点から検討した研究はあまり多くない。ここで留意されるのは、宣教師による医療事業においてその最大の目的は、治療を媒介として朝鮮人を改宗させることにおかれていたことである。要するに、日本にとって植民地医学が統治のツールであったように、医療事業は宣教のツールであったのである。

もっとも、今日の韓国の医療史研究において、宣教医療の業績は高く評価されている一方で、日本の植民地医学は批判の矢面に立たされることが多いのも事実である。医療の近代化という共通の課題を掲げて各々活動を遂行しながら、このような評価の違いが生じたのは、日本の植民地医学が強大な国家権力を軸とした植民地主義に基づいていたことにその要因が求められよう。だが、奥野克己 (2006) が『帝国医療と人類学』で示したように、宣教医療を帝国医療の起源とする見方もあることには注意されよう。

このような近代西洋医療の世界拡張の背後にある複雑で多層的な政治的側面を探るために、本発表では、朝鮮において医療の近代化という課題を共有し、それを実施・展開した宣教医療と植民地医学を比較検討していく。本発表の目的は、医療の近代化という問題について、近代日韓関係研究に刻印された国家主義的ないし民族主義的な枠組みを超えて、文明論的な視点から検討することによって、近代医療の世界拡張において先頭を切った宣教医療、そしてそれに続く形でその一翼を担った日本の植民地医学の実像を明らかにすることである。